



岷江入楚

初子

卷之二

特別  
12  
4604  
22



112 44  
4004  
22



初子

六六歲 太政大臣

春初六日院春御衣

齒固祝事

一日子日川小松市

明石御方在袴破子續著お作君行市

後花教里御方行市

後西對姥君御方行市

渡所石御方宿行市

正月二日六日院源時宮市

後東院御方行市

春日男路款市

下五初後島市

春六日院市

小訂文庫



し巻 源氏物語ノ正月

十六系院事

六系院後ワタリニ中字ノ尾ノ末ノ色リニ西ニナラシメテ作セ給ヒ  
或部ノ末ノ年五十須ヲ同シクハ跡ニキハ泉井ニテトイハセ給ヒ  
カクテ翌年八月ニ遣畢セ

春辰巳ノ所南東ニ南源氏 常上トスミ行

山ニ春ノ花ノ木敷ツクニ池ノサニ面白テカキテ裁 五葉  
紅栴檀友山吹トヤウノ春ノ院ツワサト裁テ秋ノ前裁

ヲハムラクニセメリ

秋未申所 秋好中宮御スル事トヨリ御座

山ニ紅葉ノ夕ヨカルキウノ木泉ノ水遠クスニヤリ水音  
ハキ岩ヲ冬テ加ハ瀧ヲトメ秋ノ野をハルカニツリタル其比ニ  
アヒテオカリニサキ乾シメリ

又丑寅所 小東テ東院ニミ行所方花敷里セ

添シケル泉アリテ夏ノカケニヨリ近キ裁吳竹下風  
添シカルヘク木高キ垂ヤウナル木トモ木深ク山ニキテ外紀

カキ子コトサラミシワタニ花枝 櫻麦所ノいふはまノ花ノ葉  
くシ裁テ善秋ノ木ノ其カニニセメリ

西ノ對ニ玉

東の町ハワケテ馬場ノオトツクリ時ユイテ五月ノ御ア  
ソヒ取ニテ水ノ色ニオウフウニケラセテムカニニ足マヤシテ  
世ニサキ上馬トモヲトノヘテサセ給ヒ

冬成亥町 小明名ノ御方

池山ツモ便ナキ一照ナルツハツウシヤテ水ノオモキ山ノツキテ  
ツアラタメツク

西ノ町ハ 小面ツキワケテ所々町也ヘテテ松ノ木シケツ

雷シモテアツキメヨリニヨセメリ冬ノハヒ大物家ノスツキ  
菊ノ籬ワレカホナク作念テサク名モシラヌ海山木トモノ  
木深キナトシウツシメメリ

衣ノハリ事キ玉シ人ノカクテニヨシテタテニツシ行カシメ

木上 紅栴ノウキ文 工ヒツメノコウキ

姫君 栴ノホウキカ カイ子リ

花教室  
玉子  
末稿  
明本  
室帳

アサハ十田ノカイフノ織物ヨキカイ子リ  
クモリナクアキニ 山吹ノ花ノホソナカ  
柳ノラリ物カラモウ、シル  
梅ノ折枝ニ蝶多クカキカキカキカキカキ  
アヲミニノ織物ノ干ナシノカサ子

天

こもりるのわし此等のた

元六才の正月望ノ並ヤ行幸ノ奏ニ年月次ニ書テ行也  
正月一日ヨリ又ハ冬ノ元ニキカタル元日立春十九ハ

川より及つてハ  
何れ年のくまをまき何れくえし何れの子のあは

去年の宵氣の中れりなりく一天去くとわらふ也  
幸にいふ物なれと大慶ハ眼ありの誇家也

元日元日立春也け種ニテハ冬ノ元ノ尾ニサ雷ケニ開丸  
元モ冬ノアケテハ川カタル一天ノ九時元ノ及送ニ難ノモ物

ルラ尚時仁澤世ニ蓋ニ黎民極育ノ聖徒モあはれまはよ  
陰陽モ交理ニ時候モ相調テ秋ハ短ノ少冬ハ冬ノ少

春ハ春ノ少ク時元ノケキメ分明ニ天春平ノ春也  
春ハ何ソノ河ヲ一ツノ書スリけ春ハ何ソノ字ヲカケリケル  
キハい新ヤケキト云下内家マノアサシハ己父コニ又河テ  
ニハハ泳ニキトモサレトモ定家マノまは種ハ海守雷のく

きり又まかりも妻のうすけりたけ敷アタタ人約やハ巨報十

キニ似たり是達ノ遠訓のくハ好も詠スハカラス

**地**教うぬまののうらふに 朱小書けはの同ニテ西天ノ善光ヲシルハ

又世方のゆつ云出んまカ六条院ノ花表ヲ云アラサレノ心之上ノ

初ニ天下一統ノ善色ヲ云ヒタテ、サヤウニアルニハ世界ノ教ナラフ又

処ニテモ漏シ又春ノ光ヲ云也

河務造書 此ハ北ハワレつとる也ト云そか、ぬのまもも春あまにタレ

いつとるはたからあなり

妻ののけあるなりあもといらうと云元の妻也

朱小書 教ハらあめも妻の言あまの形あま(里)も花うちりけ

私ニケケれらるといつと云アル(キ)九善ニ明テハニタ福モ又元ケ

シキニサカ各ニ善トハ人(又)物カラウラ、カケ九空ノ久、ヤサタ

カニ善ハカリニ元(イ)ニタ筋也ス本ノ目モいハ、ラハ

打燈シルヤウニ見ナサル、ナルハ

朱小書 社云新チ今在聖ノ皆道ニ射及ばや露もまらぬまのま

つのはむりの善風う吹けりハ清也

人々のいふ人々のいふ

人モ陽氣ヲ地ニ入モヒラカナル

朱小書 人のいふと云詞ニツク(キ)九朝の元ノうねくけり

はニテ地ノ富万氣入ハ人あめハ旗ナトノ天地ウキアヒ元上

キ善ノ光ニハ地人ノ心モヒラカニルハ云ナル(ハ)天地向ノ物也

心ノウヘテタミモハ善光ニハ人ノ心ニウキニルハ理見ル也

師流ニケレシニ分テ天地人ノ三才ト見ルハト云ハ

あ、のえののち、イカヨリハ天也教うぬまののうらふに

富の善もやハト云ハ地也あつと人の心ト云ハ

あ、のえののち、イカヨリハ天也教うぬまののうらふに

花云もてとよ何どの教うぬまののうらふに

今もあハ六条院ノアリサニ云

己ヨリ六条院ノアリサニ云ニル也ハ六条院ノアリサニ作リサヨリ

目モアヤルニニテ正月ナトハ所蓋ルハニニニテ花表ナラハ

はあ、のえののち、イカヨリハ天也教うぬまののうらふに





春のぼくのゆき... 上坂車... 上品上生...  
 用 花云法華経云旃檀香風悅可衆心... 栴の香ノリ  
 用 生佛國ノ木... 河云四土不二同居 方便 實報寂光也  
 用 花多云生以爲極樂淨土云々

用 前の... 対メイリ弄

用 此法持花... 兼ナクアリハモヨリ付ク根ヲ物ヲサ  
 モチノ殿ノ中キラヒヤカカ物カラ物モ寄来ル心モカス打解花和

有又人本對人... 諸人ノ帰服スル和氣ナリテト云ナル  
 け語妙也... 今不喜尤故ニ面許カサリヌ許シテテ内

秘抄

モ有... 又人ノヨリツクニキ極ニハナ  
 ク任ナシ終也

何少如人... 一

袿... 明名ノ娘... 所方ト也

娘... 明名ノ娘... 上方テ養育ハ御余ナル也  
 上ノ所子ノ分ニメ六六年コナメテ養育ハナル也

今モワサキ人... 私テノ字ニテヨキキリテ

衣裳コトキニテ目ヤスキ

えりめのいりて

河云 齒固事 見堂中曆 六本為一示

一本煮塩鮓鮓押鮓... 置鮓串免

一本鯉鳥鹿猪皆随感物串免... 置上俣貫之

一本瓦漬茹漬蕪大根  
 一本屠蕪白散六厘坏空蓋  
 一本酒蓋空坏四口  
 一本鏡相具鮓大根橋

元三街藥齒固事

内膳自右青瑛門供御齒固具威青瓷

大根一坏 瓜串列二坏 或託三坏然也 押新 切威置及

煮鮎一坏 田切置及 指完 以雞代也 康完 以田鳥代也

上七坏 内精進物供也才一以是莫類供二所志 或託在養

皇女預子 三徳院十三宮中支野子 長和三年正月二日 干貳 餅鏡

御覽之其例也 案衣冠物 皇女預子 長和三年正月二日 餅鏡

正月三春 氣言也 中為政月 泰原中 此月生固而後改遂

改為正月 高書曰 月正元者 首七月 上元日 祖祢進酒 降神致福 祥

南書大傳 夏以平且為朔 殷以雞鳴為朔 固以夜半為朔 謂

月朝故曰三朝 此為歲朔 日家國同時而宗祭也

齒固 元之 日ノ市之 齒ハラシム也 則ヨビトモヨメリ 齒固ハラシムを

カケムル也 ヌカツキ 六本ニシキシス エ一ノ高ニモ干井根橋ツモル也

餅ハハ進ノカキリモ干井專用也 ヌヨリヤカチケ剛ノ鏡山ツモル也

後教之也 世もともとののり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり

乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり

乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり

乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり

乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり

乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり 乃のり

元云ヨノ常ハ四年ヲ年ノ四ト云 年四ノ三春ナド云カ也 コノ

年向ハ今ヨリ後一年ノ中ノオソコトキニ云 四年ニラス今年年中

蓋然私云 伊弉諾神ニメソツケテモ志アテテ移ツルものハ善ク

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

トモアヒトカフハ一年ノ中モ今ノ年中ツモ云ハれん

いとまごころ **源の約**

**源**ノ今サレテキ行シ人々を迷惑ノ程ヲ見知ラ約シカケテ  
シ加テ正行モヨシアリ **源**ノ約ヲカサト人々思フ事早カ

ワシと少子と

**源**コトフキハ年姪ノ祝詞 **喜**北曰撃口鼓為伎

**文選**曰振十城之塵毒掩咸陽以取雋

**西宮記**云今人か南殿發胡子入自日華門列立東庭踏奇

**周旋**三度列立御前言吹奏祝詞畢

**日本紀** 專詞 言吹 **文選** 專或諱

振

中納言 **源** 禮後人々 **源** ノウラウイ時堂上ニ集ル  
人々 **源** ノ心カケ行人

かひてそふゆり

**源** 河内 **源** ノヤカ **源** ノ心カケ行人

**世** 俗流云 覽解鏡と吹誦此方

サ云 昔の言ミモノ **源** ノ心カケ行人

所 **源** ノ心カケ行人

可奉座 兼賀本

礼教里十トヲ始トマナタマフナリキ行セ

けさめ **源** ノ心カケ行人

玉井也

玉井也 **源** ノ心カケ行人

**源** ノ心カケ行人

海の言 **源** ノ心カケ行人

一柳 **源** ノ心カケ行人

美の **源** ノ心カケ行人

けりあてふたしー ○平の子地  
ふりあてふたしー ○平の子地  
。定との返りあてふたしー ○平の子地

たふとふつてしー ○平の子地  
海ととふつてしー ○平の子地

ふたふたのいなりきり ○平の子地  
可十部記曰正月日登岳望四方以陰陽靜氣陰憂孤  
之術也又云引小松延進年三 ○平の子地  
七廿二七 ○平の子地  
中必有此事時謂之子日遊今日之喜修旧迹若倚松樹心  
廣胸習風霜之新犯和菜奏而吸口明氣味 ○平の子地  
行末し子日松乃あ ○平の子地

用 文粹并九扈後宮林院不勝感歎耶叙取觀 ○平の子地  
予嘗聞千故老曰上陽子日野遊厭老其事如何其氣  
如何倚松樹以摩胸習風霜之新犯和菜奏而吸口明氣  
味克調也 ○平の子地

用 類聚國史七十二子日曲夏 ○平の子地  
平城天皇大同三年正月戊子曲夏賜五位上衣被庚子曲夏賜  
侍臣衣被聖主命小臣分類云日史之次予見有上心子日賜  
菜奏之真 ○平の子地  
即中毛菜世事推之蕙心妒下和奏俗人屬之茨指

用 平城天皇大同三年正月戊子曲夏賜五位上衣被庚子曲夏賜侍臣衣被聖主命小臣分類云日史之次予見有上心子日賜菜奏之真 ○平の子地  
今よの世の春をうけて ○平の子地  
中朗詠子日倚松根摩胸千年之翠海手 ○平の子地  
ふたふたのいなりきり ○平の子地  
九部抄元日之春子日け ○平の子地

しつゝとてつゝ人

中にしつゝつゝアコメニカサミツキルてつゝへふキヌミカラキヌツキルツレモ袴ヲミキルらみし紅をもちら下つゝ人は文物ヨリお下に女は不ま入の出るこまのいはあのよよ

中貴之集 白川院子日款序云くはじ月時記さしのれぬらの子日世中作らずて小松をもとはるも極をししらはらずと案の小まの向へと花をらりとあはりてもの

田船院寛和元年二月十三日戊子津幸堂野立屋屋津前殖小松有和尚記を於松野野歎子日松平急感歎之則誠和野序見ゆかたたた片記

中に東河野の山ノ小松己ラ思ヨセ侍也

小の不もー 明名とい 准名ノ真母也

可疑子 孫破子 づらの物流よらりこらとまん

しつゝとてつゝ人

中田船院子日津幸捨破子居津前也ナ  
押事子院住小松しくけの所にいて同月二つ孫の日記にてしててはるのいはらずと案の小まの向へと花をらりとあはりてもの  
二年ありくをもとはるも極をししらはらずと案の小まの向へと花をらりとあはりてもの  
大系の校よらりとまん 款ニテ

可疑遺 日本后の末・末由とよ人のつらりける所に小の  
いはらずと案の小まの向へと花をらりとあはりてもの  
わかせしと案の小まの向へと花をらりとあはりてもの  
の名をもとはるも極をししらはらずと案の小まの向へと花をらりとあはりてもの  
せん下のあの名のを急知極の校よらりとまん 同集云天曆以内にたい  
橋段表のと案の小まの向へと花をらりとあはりてもの  
いはらずと案の小まの向へと花をらりとあはりてもの

中田船院子日津幸捨破子居津前也ナ  
リ娘もという世終へつトサラニ思心アリトイフレ  
即云捨遺奇をとテカテリ松ニ寄リ初子ノ縁見物也 思心アラシン  
トカレミアヒヒク作物也ト云フモアリテハシメルトヤ 作物校

中田船院子日津幸捨破子居津前也ナ  
リ娘もという世終へつトサラニ思心アリトイフレ  
即云捨遺奇をとテカテリ松ニ寄リ初子ノ縁見物也 思心アラシン  
トカレミアヒヒク作物也ト云フモアリテハシメルトヤ 作物校

中田船院子日津幸捨破子居津前也ナ  
リ娘もという世終へつトサラニ思心アリトイフレ  
即云捨遺奇をとテカテリ松ニ寄リ初子ノ縁見物也 思心アラシン  
トカレミアヒヒク作物也ト云フモアリテハシメルトヤ 作物校

中田船院子日津幸捨破子居津前也ナ  
リ娘もという世終へつトサラニ思心アリトイフレ  
即云捨遺奇をとテカテリ松ニ寄リ初子ノ縁見物也 思心アラシン  
トカレミアヒヒク作物也ト云フモアリテハシメルトヤ 作物校



くらくーくろあ

可細碎

玉ルノケノクダクシキ八直ニカラヌホリケミラセシタニカケル  
綱ナレ

。系子比ノ評ト書クテト云物ハゴトハリ評ニテハ計ニキ  
餘後ラ今チトクハタキトシラツケテ見レ

及乃以すまか

。花らしき

とらるるぬ

。友の方ナレ

いれぬのらららけり

。宿ナトハニ給ヌ

可妹兄 目下記

妻妹 万葉

イモセトハ目下記ノメクハ伴淳佐伴丹子元才又婦成計  
一ニ因極ノイモウトセウト云ニサハ蘭夷若リノ伴物玉  
勢若君といひセハハニ道ニタニナレト云ニ此後ノ事  
と云

初ハ姉妹トモシラテ得ツンニ家ニハ妹ニテ有ケルト云ナレ

一説ニハイモセトハイモトセト云ニ

桓武清女嵯峨所  
他版即位廢

兄才又婦也 漢内親王 遺言彼一版ノ妹ノ弟ト行

淡海ニ妹ハ十重夫人為妻他版

玉云ヨレト上リ後ハナケト年比メク又婦ノ災カハ  
今モカハラ又ハ一助

粟下アケルハ作スルヤリメハ

。物ノ花教皇ハモ子ニホキテ出テ吾人ノ原ニ孫マニ  
テラウスシヤフリノ音ニアテリ人ノ恥カヤケルモ見昔ニ地  
はるるハげりハハカケル

山花らるる至ニ年内アサ花田カクノ文ノキヌラ遠リ給ハハ  
ソレキ極ハ是ヨリ下ノ四方ニ皆原氏ノクバリ給ハハキ極  
。玉鬘巻ノ末衣クハリイホアリト知見ハ右ノ花巻ニ洋ヤ

知りしきいづるものゆへ

中髪ノホウラシキキヲヤサキト云

。并ニキリアル申す事ニテハナケシテヤチトカヤウニモメツク口ノ  
糸(カモト)流ノ思多

えびうづりて

下日下紀云伴筆活字投置カチラフ此即他成蒲萄カチラフ葛カチラフ

。此ニカワララシクえひうづりといふ也

中女ノワウツリカワララシクえひうづりといふ蒲萄ノワルニ似たる也

ゆれりりいん人

。源ノ心ノ中ニ夜教里ニ容教系黎九心ニキ物ヲサレ

我公ノカハラ思フヲ我ナカラウシク云テ

云ふる人ノつとてゆれゆれとてゆれゆれとて

可作物たるはま云々いふも其世のありありと

初と男女いひとてゆれゆれといふも其世のありありと

世帯をりしとてゆれゆれといふも其世のありありと

キ人ト云ふん又夜教里書よゆれいもゆれをうづりて

やからるる人あつていふ人いふにいふる人  
又とりりの世のゆれゆれといふ人

人の心へのゆり。夜教里の心も何本ニツケテモ

恨けフメケシキモナキト

こまやふ。可子細

あつての心物なり。年回りの心物也

西のたつ(心)ゆれゆれといふも其世のありありと

。此カワララシク申す事ニテハナケシテヤチトカヤウニモ

二メ佳ナシト云。去年一月ヨリスミ物也

よかる(キリ)結スミ物也

いづつ(い)きりゆりなれ

いづつ(い)きりゆりなれ。人といふ人  
山吹よりまじり。キヌクハリキ事洋紙也





何トカハルンスラシイカニウシロメタツカラ又街心ナリ六山シカシ  
又キト云ニヤ

ちりきりしもの  
明石上御中リトキアハトセ  
何しと云ニヤ

硯のあり

このうがふまのしきほりしり云端縁ヤ  
丁ニ唐東京錦ニ唐モ東西五京アリ其内東京ノ錦ニ  
ナリト云舒明天皇御宇以唐東京錦換用吾朝  
中唐東京錦茵友ノ田文ノ白護方一尺八寸縁白地錦四方

ニ洋裏蕨芳平絹言源ニ今東白地錦シ東京錦イトル也  
云一物モロコシノ東京トイハルニ織タレ物ニ或云白地ノ錦  
。品終トイハルニヤ也東京錦トハ白キ唐錦ニ尋常茵<sub>花</sub>洋<sub>花</sub>

うの火をけし  
可<sub>一</sub>葉<sub>二</sub>普通火相ん  
係<sub>一</sub>ほくゆし  
一<sub>一</sub>汽<sub>二</sub>蒸<sub>三</sub>物<sub>四</sub>大<sub>五</sub>トリ<sub>六</sub>中<sub>七</sub>也<sub>八</sub>

物<sub>一</sub>と<sub>二</sub>い<sub>三</sub>志<sub>四</sub>あ<sub>五</sub>り  
可<sub>一</sub>珠<sub>二</sub>又<sub>三</sub>云<sub>四</sub>毎<sub>五</sub>也  
えい<sub>一</sub>く<sub>二</sub>れ<sub>三</sub>め<sub>四</sub>り<sub>五</sub>る  
可<sub>一</sub>裏<sub>二</sub>衣<sub>三</sub>香<sub>四</sub>方  
可<sub>一</sub>裏<sub>二</sub>合<sub>三</sub>ニ<sub>四</sub>反<sub>五</sub> 零<sub>六</sub>陵<sub>七</sub>香<sub>八</sub>七<sub>九</sub>分  
可<sub>一</sub>裏<sub>二</sub>合<sub>三</sub>ニ<sub>四</sub>反<sub>五</sub> 崖<sub>六</sub>唐<sub>七</sub>ニ<sub>八</sub>反<sub>九</sub> 麝<sub>一〇</sub>香<sub>一一</sub>三<sub>一二</sub>反<sub>一三</sub> 麝<sub>一四</sub>金<sub>一五</sub>一<sub>一六</sub>反<sub>一七</sub> 唐<sub>一八</sub>香<sub>一九</sub>半<sub>二〇</sub>分  
右<sub>一</sub>六<sub>二</sub>種<sub>三</sub>各<sub>四</sub>列<sub>五</sub> 指<sub>六</sub>力<sub>七</sub>教<sub>八</sub>和<sub>九</sub>合<sub>一〇</sub> 唯<sub>一一</sub>蕨<sub>一二</sub>合<sub>一三</sub> 崖<sub>一四</sub>唐<sub>一五</sub>心<sub>一六</sub> 枝<sub>一七</sub>碎<sub>一八</sub>和<sub>一九</sub>旦<sub>二〇</sub>好  
一<sub>一</sub>沉<sub>二</sub>衣<sub>三</sub>被<sub>四</sub>香<sub>五</sub> 广<sub>六</sub>香<sub>七</sub>異<sub>八</sub>名<sub>九</sub>也<sub>一〇</sub> 貝<sub>一一</sub>蛸<sub>一二</sub>香<sub>一三</sub> 或<sub>一四</sub>云<sub>一五</sub>



川返りのらんヲ云てトウル學ノ玩一アアリレト云ナルハ

△ 息あらしそふる  
アま觀 玉同く

ほげつとん

可拾物をさしつゝあつて取れぬものありしをわづらひて  
川のほとりへ遊ぶものありしをわづらひて  
ノリヲもむるニカキ終てハ川カニタレナクサメ河ナレ  
川并可御遊々ニルをトモシクモアラスト云心ヲトル

いさくへー 〇まの子地 けま不家事上比ニハラス

中源氏素ノの衣上ノも習しを端ニ何本ツ書スサニ終レ  
わづらひとん 〇川

さあまよけやふる 〇川

川のほとりニ白キ浮モノキ又源氏素送ラレ由上卷ニ見  
わづらひとん 〇川のほとり

中正月一日ノ事ノ亦也 明名ノ方ニトリ終て事ツイカ  
後所亦ノ人々モテサツキヲマヘリ下河南ハハハ  
テ目サニカルトアリ大方ハ世上ノ方ニヨリ終ハトリ玉フキ  
ニカシハ人々メサニシク思フ

れがわづらひとん 〇人々メサニシク思フ

かぐしとわづらひとん 〇人々メサニシク思フ

可好物 自氏文集 在者 日ハ六 けやぐとハ善魚ニツケテ  
オゾキ 後ナルセスクシカラムホケトシタレ海ニハアラヌ

選利園中子中尤物ヲ本自持後序  
世間尤物不在大ニモ能蕩念ノ心則為害 文集八條門  
意者不但感其事亦能徳尤物實乱階末於の末也  
陳煥 長恨 〇

大鏡云古今撰せしむり行り費をなめていりて和のつ  
ふまゝのめり  
しとふいづちまきんひきまひのたよりあやまら  
れをいふけやけしむとらぬし  
中待トリ行つらとふし御方ハワナリ終るんやきせ  
スウシメサニキム  
むをむくワウラハキムナレ  
ケヤケヒトハハニセシメサニキムトシテ終トモハ心ワ  
ウラヒキトハ上ノサコリ思ぬキトキ源ノタノの終し

集りてのわくのよみ 小社 は経目録ハカリニ各目ツクニ我ラオチ  
ツハノセス不害  
可降時密ト橋政園白ノ亭ノ春ノシメ上達アツ招テ延シ定  
しん坊ナラ子ハ降時密ト号スル日屋ヲハ大養ト云中宮東宮并  
左大臣之執政臣朱黒大養ヲ殺シ降時密ト云日屋ノ後黒養  
大養ト云之モ源氏執政ノ友ニ朱黒大養ヲ殺シタルハ降時密ト云  
大養亦 正月三日宮大養 中 園白降時密四日左大臣

大養五日右大臣養 僧母屋大養 大長初仁渭廂養

中河内院 院 ヤニシリ大養ハ毎年正月三日各己ツ終リ其時  
密ノ使ナリテ密ノ人ヲ殊文振替メ有氏ハ大臣ハ長者ニ  
ヨツ朱黒其書盤シ氏院ヨリワタメテ用タル自余大臣ニ未ナク  
口本ノウツ工様ノ器ヲ用ヤル者アリ鷹飼ナラ名アリ降時密ト  
云正月二日三日間園白大臣ノ亭ノ密ノ人ノフト果シテサテ降時  
密トナラカキ長之書盤ナトハ用ヒスラニキムツキススル  
催馬系訓詠カタヌキナトアリ樂黒ツメサス物相子ニテウツ物  
源氏実太政大臣ニヨリ降時密ノ市橋政ノ長ノ如シ  
私年中行事抄云 正月二日園白家降時密ナリ  
花多ト根元抄トお遠花多ノ時ニ改ラル  
根元抄云橋政園白家ニ春ノ始大臣ハ上ノ上達アツ振川世市  
定シル云物ナラ子ハ降時密ト云ニヤテ大長ノ母屋ノ大鏡ニ年ヲ  
テ行ハ鷹飼ナトワナリテ其真アハルニモ長氏長若朱黒御食  
ヲ殺ルニ大長家ニ後黒ノ養ヲシテハ降時密ニモモサナリテ  
尋常ノ大養ノ儀式ニ同シテツカタニ御掩アリテ候る末ヲ終フ



不まの梅やういひのまき

川原時客は肩又キノナあり 花はありテ奴トクナリ  
あはるん時あり

可メリカし時

物のうらも 川に殿権馬宗

中時客は樂意を月を野曲人場柏はよくふたれし  
川原時客は大譽の例よあまて笛の音とて海に  
ふや物のまるとしてあつるし地物のまるとして曲に  
て町の洞もまるとして曲意のまるとして曲に  
あまをまるとして

ぬのりねのぬらりて

まき表成けなすし 秋に年がわ今なかまき

可秋藤安人左京人父不見丸中并近平がね近曆廿三年

正月廿七日任赤坂中并がわめえ 川に殿権馬宗 呂ふのまむ下ふまき

ふきくさの花二枝ふれくさのふくくさのふれくさ  
きりやめつりせりや

ふれくさのふれくさ

可所さくは有記は後漢書は朱草福草の十ト書テヨム

好忠集は福草又材種トカケリ風土記は此草トト書之曾松

三葉四葉トアルニツキテ木トモイリ草春初必三葉四葉ト

又松トモイリ見れば少彦名命松トクミテ家ヲ作ラト

又三枝松トテアリサトシハ三枝ノ花ヲ折テ酒樽ヲカサ

ニモアハ各別ノ事ハ似たりとの三葉トツケンメハ今ノ三枝

字ハモ心カヨフキ

宗神天皇内侍取門殿ヲオシ申サテ温明殿ヲ七間作りテ

崇申サシ事ヲ三葉四葉ニ殿ツクリセリトヨムハ三葉四葉

合テ七間セリ字ヲもよム也三間四間七或記ハ三枝四枝

フアニ又童テ屋敷ヲ多クツクリ童タル心ヲ秘記セト云リ





小  
院時客五日叙信七日節會八日大極殿御齋會或行幸上御  
女此ホノサハカシキ日比ヨスト云々

ひつりのまねのこい

未摘やあまののやうに心食サス人目ヨクアツカヒモシク  
人めのこい

未摘ハ人カラセハ人目ノカサリ斗ツ常ニ行ニ

はつりともえーしつり

初々蓬生巻、所乳母ノ侍従ツ姑ノ太敷ハ方伴ヲ筑紫(下向  
ノ暇我内々の下千ネリケラウに、九尺アツリ、アツリニテ  
イトキヨラアルは、こよアト、メイヨ未摘ハ髪ハ白キハカガ  
サハ年ヨリテワモナキ

はつりみし年よりよむと流しつりて流しのこい

可成めあたまのあま上年つり老よきし、あまのこい  
はつりよの中よきし、あまのこい、あまのこい、あまのこい  
中あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい  
流のヨトミトシラカノ交リタレ

いふ心は流し年よりあまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい  
あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい

右今今の流し水とあまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい  
トエラフそ、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい

あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい

流のこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい

可成鬘巻、未摘ノモト、柳ヲリ物ヲ送ラシキ人カラニ  
思ヨリ、テセラシメテ事ナシハケニコソト云々

あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい

可成練、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい

あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい、あまのこい

何れをり物のつらさ

川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや

さよひのつらさもいふ。人かよきや

川にけしきもかよひのナキナリ例ノつらさも多かるや  
大い河氏ノ送り給ふ小掛ノ御衣ニ次ニ里キカイヨリカサ  
ハ入キヌ分世何れ物ノつらさも表着ナリナリや

さよひのつらさもいふ。人かよきや  
さよひのつらさもいふ。人かよきや

川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや

と何れも河本丁のつらさもいふ  
川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや  
のつらさもいふ。人かよきや

トツリ満テ多シ中ノ如サシモ思給又トノ心用ゑモテ  
ナレ心アルト心ナキト人ノ上ニワカレ物ナレトモ

川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや

先モ角モ源ヲたのめ終ホナルガアハナルトモ

川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや  
川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや

川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや

川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや

川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや  
川に物ノつらさも未橋の方ニ用ゑせしむるは何れトモ見へんや

こらしくしつちをふらちりしめ

中丸の巻ニモアリ五音ノ通ニモいこらしくト云

だいの阿者梨志也 未橋ノ冠ニ

うらまふをちへとせにのち

中丸の巻ニモアリ五音ノ通ニモいこらしくト云

ヒタギノヤウナル物モトウシ

私語をきけり未橋巻ノ見タリ其眼源氏十七歳也

ヒタギノヤウナル物モトウシ

ヒタギノヤウナル物モトウシ

いこらしくしつちをふらちりしめ

中丸の巻ニモアリ五音ノ通ニモいこらしくト云

ヒタギノヤウナル物モトウシ

いこらしくしつちをふらちりしめ

いこらしくしつちをふらちりしめ

可也の真

不強人

まきく

山不陽人也

中心うらしくしつちをふらちりしめ

中丸の巻ニモアリ五音ノ通ニモいこらしくト云

ヒタギノヤウナル物モトウシ

ヒタギノヤウナル物モトウシ

うらまふをちへとせにのち

山丸の巻ニモアリ五音ノ通ニモいこらしくト云

可也の真

不強人

まきく

山不陽人也

山丸の巻ニモアリ五音ノ通ニモいこらしくト云

ヒタギノヤウナル物モトウシ

ヒタギノヤウナル物モトウシ

ヒタギノヤウナル物モトウシ

ヒタギノヤウナル物モトウシ

可也の真

いづりまき白入の衣

○いづりまき衣モナキト也

可衣らまの白紗衣衣より衣の好衣ら衣る

中衣いづりまきト衣惜衣カラス内衣心衣ニカセテ衣る

可衣ら衣ま衣の衣好衣ら衣る

私衣言衣拾衣遺衣才衣六衣別衣部衣又衣文字衣ね衣後衣わ衣き衣ら衣る

稿衣云衣頼衣呼衣も衣ぬ衣て衣ら衣り衣ける衣所衣ニ衣は衣る衣継衣母衣内衣侍衣の衣好衣ら衣る

の衣好衣ら衣る衣け衣し衣け衣ら衣る衣き衣て衣つ衣け衣る衣業衣々衣

可衣ら衣ま衣の衣好衣ら衣る衣き衣て衣つ衣け衣る衣業衣々衣

中衣いづりまきト衣惜衣カラス内衣心衣ニカセテ衣る

ニモ衣け衣つ衣ア衣ル衣也衣。中衣一衣同衣

用衣玉衣を衣む衣き衣て衣つ衣け衣る衣業衣々衣

た衣ゆ衣ま衣の衣

可衣隨衣風衣史衣記衣隨衣玉衣篇衣徒衣果衣及衣風衣俞衣矩衣及衣緩衣

ま衣て衣つ衣け衣る衣の衣好衣ら衣る衣業衣々衣

々の川衣と衣あ衣ん衣の衣好衣ら衣る

中衣いづりまきト衣惜衣カラス内衣心衣ニカセテ衣る

自衣ら衣ま衣の衣好衣ら衣る衣業衣々衣

ひ衣の衣院衣の衣好衣ら衣る衣業衣々衣

可衣長衣倉衣日衣記衣

中衣いづりまきト衣惜衣カラス内衣心衣ニカセテ衣る

玉衣を衣む衣き衣て衣つ衣け衣る衣業衣々衣

ニ衣第衣院衣ノ衣好衣ら衣る衣業衣々衣

中衣いづりまきト衣惜衣カラス内衣心衣ニカセテ衣る

あ衣ら衣ま衣の衣好衣ら衣る衣業衣々衣

中衣いづりまきト衣惜衣カラス内衣心衣ニカセテ衣る

あ衣ら衣ま衣の衣好衣ら衣る衣業衣々衣

あ衣ら衣ま衣の衣好衣ら衣る衣業衣々衣

あ衣ら衣ま衣の衣好衣ら衣る衣業衣々衣

あ衣ら衣ま衣の衣好衣ら衣る衣業衣々衣



あつしと

かりしとや

中<sup>レ</sup>かりしとやとくもすもすもすのあつしとや

○ワナメの思ひおとすに  
トヤカクの終に紀伊守が継子と  
ルラ邊ノ終テの終に

かひつとまりしとやとくもすもすのあつしとや  
中<sup>レ</sup>源氏心ニヨノウ子ナラハ継子の紀伊守ナラハ  
人の心もすもすもすのあつしとや

かのあつしとやとくもすもすのあつしとや  
可<sup>レ</sup>伊守守りて後紀伊守もけし  
つとまりしとやとくもすもすのあつしとや  
中<sup>レ</sup>伊守守りて後紀伊守もけし  
の終に居るはとくもすもすのあつしとや

用

○<sup>用</sup>空<sup>ノ</sup>源<sup>ノ</sup>力<sup>ノ</sup>もすもすもすのあつしとや  
空<sup>ノ</sup>源<sup>ノ</sup>のちやとくもすもすのあつしとや  
中<sup>レ</sup>源氏心ニヨノウ子ナラハ継子の紀伊守ナラハ  
人の心もすもすもすのあつしとや

い<sup>レ</sup>かりしとやとくもすもすのあつしとや  
空<sup>ノ</sup>源<sup>ノ</sup>のちやとくもすもすのあつしとや  
中<sup>レ</sup>源氏心ニヨノウ子ナラハ継子の紀伊守ナラハ  
人の心もすもすもすのあつしとや

○<sup>用</sup>常<sup>ノ</sup>言<sup>ノ</sup>もすもすもすのあつしとや  
中<sup>レ</sup>源氏心ニヨノウ子ナラハ継子の紀伊守ナラハ  
人の心もすもすもすのあつしとや







當時亥一訓始分人亦入右近陣亦理管統計時即意子中  
務中親之常隆太平秋之木納言在東右權中納言在東右  
仲平親在定方納言未侍篋子教年人亦進到竹架東以列立先  
奏調子次百春樂進南小惣三度就南御亦立言吹吐詞持  
囊荷綿即奏誦鳴曲次奏此殿此間內屋察立其盤食何東  
拂了察施座子奏秋一待著座子親王云云未下殿行酒三四巡後  
更調秋竹河曲使地到庭中內侍座人未持被綿給階坐以下  
年童心之双帶進上階給綿彈琴分下亦不了秋我衣曲退上時子  
一刻自跪口到東衣息不曹子流言即御殿次南侍曹子取書食次  
兼香殿息不曹司藤景殿次克明親王直序取湯食次東宮宣  
四冠還衣入內裏復右近陣前之東庭拂了給平鋪座給酒者令奏誦言  
三四曲後給祿亦以給祿年人給祿五人未給襪子推玉物所  
亦給足絹即入內亦未退也于昨拜三刻

同十七年 廿三年曰之七年

奉王祀延長七年踏方人裝束冠履麈尾袍白下襪着深  
皆持白杖以着至加列前官指腕釵振靴高中子着綿的童子三年

人列在書常思金何子其裝束如年人裝束加五鬘房及着絲鞋  
花井初竹技進中間綿其束及一唱囊持言清法稱准到綿唱一  
十百千可儀不數不退到吹花指中右侍御危方及右指中右實賴右方  
以出小戶香中宮以微殿次郎香舍王云云次兼香殿大女殿次東宮  
臨坊春御前危右大臣有障共不希宿不故不論又云內侍二人相分  
被綿且年且還持綿匣但彈琴者在下男危人二人侍九御  
簾中於庭中被之奏我衣曲退也

踏秋事 私劫

八日被定論方之夏石內院察官人作自明日可辨倫給言調樂不  
酒者并可奉帖綿六帖細也一連祿新綿十連綿花新綿二七束  
三兩之由台拂了察作可奉床子鋪設之由台主殿察作可奉燎  
火之由台危右御門府作可拂中院并合奉堂之由調示之事晴日月中院  
作之石大冠有本之察官人亦作未高日可打古尺儀中院西近行合奉堂仍更  
院願作可設同日中院出之樂食之由台修理職人內作令進言以  
以下年人之心一杖細手同殿  
又云大臣大將并女御未家司作可并倫來高論前之食之由

酒飯被綿隨下有列又云御巾子送作可奉高巾子言又言內  
苑寮作奉高巾子新冠絹更狀以冠二條又右同寮信濃布  
一丈六尺即以一大令縫囊以六尺遺於畫下謂小舍二人囊而新又以  
內苑寮不進綿遺掌侍亦令調被綿以六條力  
心新以十折又以細屯綿一連遺同取令調高日中院折肩綿  
心新以十折又以前府官人作可捺進杖五杖之狀被府進上之後給作  
二折物取令削儀又以巾子冠未給御冠師亦令調設又令設長檀  
仲長檀御案座起之間袋而小舍二人持出取入餘腰打以用內  
祿法款以六人子子線裨各領款掌已下掌人已上支子線衣各一隊示  
人九人各裨子一領腰斗袋持物師亦各足絹為七尺預此列一國新注而已  
事了了巾子進納也

同日夜若有男臨之亦六七日五御案被擺定亦以下囊持上人之  
行到院中其後於中院習禮三三度以酒殿河贊殿者為備具之資而香  
我在局中

前二日於中院試于內苑寮之平張備酒饌拂戶寮之床子手殿寮奉  
炬火前日大房省本立寮之櫃中院裝束色日可裁注深當缺脈亦可  
加裁又諸司二分下預此市若若袍缺脈袍內苑寮并備酒饌

備晚乘著麴塵袍白下裝著座手殿牛囊持內苑寮被綿作物下  
奉綿花白枝前四五日召內苑寮綿一也但巾子冠自下給之苑高夜可  
人復右近陣自月華出御東原南四間王依百奈上春日元  
長務內苑寮賜王酒著御厨子取供御料方人而殿而教調自  
仙華門列立東庭論方因說三度列立御前言吹進七高綿奏祝  
記了唯進計綿奏餉鴨次奏此殿曲著座

行立間攝下寮當御階而進相立許丈之床子為方以下兼上  
座各相對南小為上行壽殿西階南過王床子為管絃者座南  
廊小板發東進西而東上發皇之札為打殿斗持囊座著諸  
司二分吹管因著此座同壁下北而西上發皇為殿上侍內苑寮  
昇四支豐盤三基之奉人已上座又三八支豐盤為管絃者座  
臺盤皆并備肴饌

王已下之殿勸盤侍臣取氣三四巡後吹調子唱竹の曲即起立列  
之如前方唱後業人已上雙之樂進半上東而南階侍二分被綿且兼是  
女部三人持入彈和琴者已下男苑人傳取自行蓋中殿中政之產  
家曲退自北廊戶向不院瑞茶所座如初方以下座給庭中

而北對面と後經若座在横田北上  
西而可變斗舞持座在而西上北而  
奏管絃數廻一祿有免

天慶二年正月吉日治部卿人菊麿持袋元將監伴有時以上元近  
衛大石富門玄鑑著位袍淺皆延長十五三四路方各下未同侍  
并一親王宿下等

國史云 天平六十二、冬已朔天皇御朱雀門覽方恒男女三百無余  
五位已上有風流者皆交雜其中正四位下長由主進四位下栗栖主  
了王後五位下野中五木為以本未唱和為難故曲係部曲淺芽曲廣  
瀨曲入裳判曲之音令都中士女縱觀極觀而向罷賜奉方恒  
男女不録有免

つぎの院のついで

可源氏院号のあけ院ト号ス為元在而二付テ院ト人  
院ト云市私去物須佐若後代ヨリ書ク弟人  
みらのりをて  
私方東斎極丸之

このゆきへいよ

。源氏、法乃の徳能なる也

ひりりなきのあいにいよ

中寝殿ノ東ノ對西ノ對又たり右ノ太キワネトナリ極東なるれり

に一のたのめ作ら

。のん作ら

。のん作ら

。のん作ら

朱雀院名のあまのめりけり

私乃御殿ノ右なるや在河ニ朱雀院あり其院ニ各

トヨリお遠よあは物成のあや

。のん作ら

可伴行尺 水澤を急きとら

水急抄云け市定法勅使ヨリオレ陸地下向之暇ニ每澤給御服

新本海路ニ澤定し何そ

水澤ト云

私親本

一洗云急テ支度シ九市ノ相造リしをすえキト云水路擇

不中用ト傳ル

今葉端奇高ニ飯擇水擇ト云市アリ本寺記九条右丞相記下

見ニタリト心水擇テ有キテ市ノクニテ賞然モルル也

有約依

中本寺王記延長七年正月路前入路西行東行又西行列

立袋持取綿到吹ノ遷入更入テ置所ナケ水擇

日記云天慶五年正月十日恭原内親王能隆兼帝殿仍被綿

侍女授ニ後復卿農水擇更詔昭陽舎没盤饌

日記云天曆四年正月十日恭中宮至ニ賜饗

院侍頭更上皇還所復殿詔款畢ヲ賜食

九条右丞相承平四年正月十日路前飯擇水擇所定之中云

飯水今更飯擇九条右宿下飯在右大臣宿下水在右

宿下飯

今東水比ヤト男路前ニハツテ

テ酒或湯漬ト云月ト云元々水擇ト云市ニテ簡畧ト

用

心又飯擇も芻擇も云ハリツラハテ養老ノ

の処ニメケルヲ擇ルニ人ナリ此擇ト云ノヤト云

水ハリノ人ノノコト云ハル擇ト云又人ノ飯ヲ食

芻ヲ食スル飯擇芻擇ト云カク酒肴ハリノ用々水比ヤ

ト云ハ養膳ノ用ト云飯擇ト云ケヤ又鹿牧令水路

ルヤト云元々水擇ト云今更ノヤト云

養平四年正月十日九曆之路前飯擇水擇ト云

水今更飯擇九条右宿下飯在右大臣宿下飯

天慶五年正月十日本寺王記云前ノ奉太后云

綿次恭原子内親王 肅宗 後酒肴ナ成明親王同住ノ飯仍被

綿後復養水擇更詔昭陽舎先被綿而抗一食饌

御路前入ノコト云ハテ院ニ

擇飯擇ト云如ク路前ハ

ナリト云ハ神人ニ

用

用

用

用

用

もつを飼成て水弥人、世俗をやりとりしつて第九ト云  
のそ又のあてめらにさうさのあつひ

可春李着白襦袢亦老年のるまゝ冬は白重を足す亦  
あつは但し其色はあつと其父袍、白下襦袢を足すは給方

の定まる亦々本事五記よりなり  
味青私麴塵ノ袍也、但青色はアツ色ト各別也

中李王記浴衣、人仕衣、冠麴塵、用腕袍、白下襦、着深  
皆拍白杖、西宮仕衣、束抄、青色、麴塵袍、白下襦、半侍、白石

常深履、綿花、白杖、い、束、け、ま、あ、を、い、秋、以、い、下、と、い、く  
そ、を、ま、る、厨、斗、袋、掛、け、入、任、袍、着、る、由、見、一、奇、白、杖、奉、令、

あ、ま、を、好、ま、奉、重、い、線、鞋、を、く、く、い、つ、り  
あ、を、又、麴、塵、を、去、任、の、袍、を、い、く、私、束、い、黄、樞、深、こ、い、麴、塵、

ト云、青色、又、青色、各、別、也、惟、量、多、い、青色、麴、塵、ト云、た、い、も、也、  
必、毛、麴、塵、ト云、い、定、れ、る、き、ん

あ、ま、の、あ、い、麴、塵、も、云、腕、の、け、の、あ、い、の、あ、い、一、は  
白、い、あ、い、下、さ、い、の、あ、い、白、い、あ、い、の、あ、い、一、は

のさ巾子を穿る袍六位の中あり麴塵の袍也

い、ろ、く、あ、い、の、あ、い、下、襦、袢、り  
は、あ、い、抄、い、黄、樞、深、天子着し、或、梅、麴、塵、也

青色、天子上皇、親王、諸、臣、重、殿、上、未、要、也、西、宮、之、此、院、人、用、云、文、也、  
或、云、青色、冬、も、な、も、唐、鏡、海、線、綾、一、也、

作、革、車、直、旨、之、蔵、人、必、着、青、色、と、上、着、所、し、日、に、蔵、人、不、着、く、  
吏、丁、王、記、天、慶、四、八、四、源、為、明、加、元、服、源、氏、皆、五、深、鹿、服、麴、塵、袍、給、

髻、或、抄、い、麴、塵、を、色、ノ、亦、也、  
私、云、以、け、記、見、く、麴、塵、を、色、を、差、列、九、杖、を、所、変、え、

保元三三二内、高、ろ、い、皆、差、を、色、麴、塵、之、中、の、あ、い、に、  
色、袍、尼、サ、侍、成、意、を、父、腕、腕、又、又、地、下、に、文、を、あ、い、

私、但、西、宮、抄、い、麴、塵、袍、白、下、襦、袢、ト、色、目、分、明、也、  
か、い、し、乃、り、い、

可、踏、款、人、の、綿、造、花、差、冠、款、也、  
長、ろ、巾、子、



きい乃りてうきりてまうるぬ  
可右三祥也

踏秋綿

續日本紀曰天平二年春二月丙戌朔辛丑天皇御大安殿宴五位上殿以移幸白皇后及百官主典已上陪從踏令具參且行列入衣裏賜酒食因令探筮藉書以仁系礼智信五字爾其字而賜物以仁之施之糸之懸之礼者綿之智者布之信者段布也今綿之賜ハ於礼ノ心ニ在リ

中より御ハ内務寮よりことひらりと内侍殿へおを階の上へ通入て拍向ハ秋以下舞臺にて双舞スミ階とのりてこれ縁と縁ぬき界ひき下のうけ綿ハ位殿人層中よりれりてうき申りてことひらりと又礼綿ヲ積置らうと書きたすことひらりと一十百文可カリハ袋入テニヒテ又カキト云秋とてひらりと申りて今世ニ終て久しき事ナレバウキなるゆへにわろく新儀式ニ書延長御記ト書けりて今世ノ久しき事ハ儀式ノ物成ハ

三条院乃中を礼ハ祿の綿をハ内務寮より申りて  
らしむ者存在りましけられり

午井物りてかきくかきりて

。紅梅の右大臣と云ふ人ハ名号とわろくあつた

系然私をうま申ねのまハ午かおまろくわろくわろく  
といひて申ね相本ハ午かねハ紅梅大臣相本ハ  
まろくわろくわろくわろくわろくわろくわろく  
相本ハかきぬのまろくわろくわろくわろくわろく  
といひ

可秋藤安人

左系人父不見

私助ニ補任

後位下士師

左中近衛将延暦十四年二月廿七日任系後中近卫将也元

いなり乃人

。延長天曆ト時代をかきりてわろくわろく

上古の人ハ指テ賢人ニシ共カレ方ニ又ウキタ人モ入ル

対人からん様もあすくし三窓用ナルト夕音ワチ給へ  
申将うしとん 夕音ヤ

素抱私げ詞不申わし夕音とつるん

下伸作道政有識此方とのこつてつるの庭のこつて  
夕音とつるん

海氏の道通す文なつてつるの庭の方のつる  
夕音とつるん

夕音とつるん 夕音の下つるん

夕音とつるん 夕音とつるん

夕音とつるん 夕音とつるん

可万春樂 踏奇曲 催馬楽 夕音とつるん

夕音とつるん 夕音とつるん

踏秋ノ秋我家に殿万春玉竹何け四曲ワタフ皆昌也

我皇延祚信仙齡 万春玉 元正慶序年光曆

夕音とつるん 夕音とつるん

夕音とつるん 夕音とつるん

夕音とつるん 夕音とつるん

中西あ妙云踏奇日舞人起座唱万春玉

我皇延祚信仙齡 万春樂 元正慶序年光曆 催馬楽 漢内三船撰

中今葉万春樂すつて八夕ノ侍とつる萬春玉とつるん  
万春玉ト唱ル踏奇の舞人ノ立サミ云事丸ワ原氏君脚





射手不着座注雜色二人一人石射手者一人出納一人令持中二

脚一脚置裏錢花高擧等一脚置酒樽木並以柄鏑小舍人昇五六按書

東着座入候極樹下慢西色更姫取相從内務寮給王侍片

給酒饌出坊右將監准仰云懸的准懸川的矢申的矢

内髪着立極樹下慢去 天皇射註 三方間以中の為限殿上小舍人取

自棚前越渡着安福東廂一人取杆一人取筒取杆支棚西

色執間者自班西慢西色上間暫令却更姫取中鶴持主

二間起進乾下取花鬘獻之踏掌取立沖花鬘札御賭

臺於沖座南所誦橋上若無沖射不或獻之

次將依作懸替親王的一取掌取簡着的付座言親王射堂在

射殿十色射一殿所射殿十色射一殿所替的一射下射道中否頒行杆以充裏錢有

所厨子取供菓子于物亦所酒射雜色納合早中取更姫取

退出如春时依作分前後令射先取掌持間硯上て去介取類券

所覽了一百之各准念人消掌取獻懸續射分

依言獻懸物的付着侍次射了暖市拜列交庭中小西而上物應作也

作給懸物中秘者令射一度有中者若中秘者依

可賜之依言獻

注 延長五三九踏秋後宴女所世后代王て心射手給得禄本者

名女后給女按束

兵式十七日大射前廿日者點親王以下五位上世人前二日以間定

能射者廿人若不足者後於有南門射場令調習

山曾踏秋の後宴二三月此間うの膳負ありて西島抄み

そ此の内裏してのゆゑ私の後宴は六条流より行

後戻つるや女京王より用ひありしはよりありしは

ありしはよりありしはよりありしはよりありしは

五之林帝より踏秋の後宴より二三月より此後とて

れよ此の私より女よの後宴よりすへといひ女京のゆゑ

後戻りよりありしはよりありしはよりありしは

ありしはよりありしはよりありしはよりありしは

踏秋の後宴と換へて候のみ

可管注は皆集細事候し

琵琶袋 西錦或赤色浮線綾

和琴袋 巾箱

第袋 錦二幅

笙笛袋 太底月衣

山崎とていへば十二絃がさす和琴琵琶土ノいふ物々の中  
入ル也ふえと云対ハ笙笛袋ト笛の中ハこころん  
第乃少くわらうりさ錦ニタリも裏ツテ琴とつて  
何れもいへばゆい巾箱とてあやうき物々といふ  
入ラるものゝさうさうなつてつて笙笛の袋ハ西錦  
ラ唐綾とてふ双ハの洞なりくられやあやうき物々  
けつてふさうさうさういへばさうさういへばさうさう  
あやうき物々といへばこれけり花田の唐綾のつてけり  
さうさういへばさうさういへばさうさういへばさう  
けて中上并ぬとつて和琴の袋ハ巾箱或は和琴乃袋  
ハ唐錦とていへば寸鉄圓ハ巾箱とていへばさうさう  
の袋ハ巾箱のあらうりさうさういへばさうさういへば  
いへばさうさういへば  
巾箱買テ 朱カキ 秋箱  
ゆつてさうさういへば

用

げさまゆ花巻と女まき(子)物々いへばさうさういへば  
さうさういへばさうさういへばさうさういへば  
の巾箱の次げ女まきの(子)物々いへばさうさういへば  
とさうさういへばさうさういへばさうさういへば  
。和言とつて此並九巻月次とつてさうさういへば  
さうさういへばさうさういへばさうさういへば  
の後高ハ二月と月の子とつてさうさういへば  
の後高ハ二月と月の子とつてさうさういへば  
を見下あると外はさういへばさういへばさういへば  
女ぬきとのさうさういへばさうさういへば  
進助竹ノ巻ハ巾箱とつてさうさういへば  
よ女さうさういへばさうさういへばさうさういへば  
のりとのさうさういへばさうさういへばさうさういへば  
床ありとつてさうさういへば 竹何巻と抄する次記





